みなと・つるが・いまむかし

観光ボランティアガイドつるが

みなと・つるが・いまむかし　　改訂版

発行日　　2022年　7月　1日

発行者　　観光ボランティアガイドつるが

みなと・つるが・いまむかし改定検討委員会

寺下　雅裕、　得能　昌子、　野添　功、　増田　正樹

松村　由利子、　向　和夫、　森　将臣　　(50音順)

本書にかかるお問い合わせは、下記にお願いいたします。

連絡先　　〒914-0079　敦賀市港町1-25

TEL・FAX　　0770-21-0056

改訂版の発刊に当たって

本書「みなと・つるが・いまむかし」は、当会の前身団体の一つである「ガイドつるが観光ボランティア(ゆりかもめ)」によって、「敦賀開港 100 周年」となる 1999 年(平成 11 年)、敦賀の主たる観光スポットを取りまとめ発刊された「みなと・つるが・いまむかし（Ⅰ)」と、その２年後、敦賀に関連する人物や遺跡の話題などを取りまとめ発刊された「みなと・つるが・いまむかし（Ⅱ)」の二冊について、その構成を見直し一冊にまとめ、カラー写真や図の活用及び内容を最新情報に更新するなど、２年の期間を費やして改訂した図書です。

現在の私ども「観光ボランティアガイドつるが」は、2011 年(平成 23 年)に４つのガイド団体が結集して発足し、ガイド活動を中心に観光推進の一翼を担う団体として幅広く活動を続けています。その活動の一環として“ふるさと敦賀の悠久の歴史、豊かな自然・文化など様々な魅力”を再確認できる資料を伝えていきたいとの思いで、これまで活用してきた「みなと・つるが・いまむかし(Ⅰ)、(Ⅱ)」を改訂することとしました。

改訂に当たっては、例えば、ある特定の地区の景色の移り変わりや歴史を再確認するときは、日本全体の歴史観やどのような背景で歴史が刻まれているのかなど、時間的経過の中で考察する必要があり、当時の人々の想いや生き様に思いを馳せながら、様々な情報を追い求めていかなければなりませんでした。また、作成時に収集した多くの情報や考察経過などを紹介したい一方で、限られた紙面に構成・割り付けするための取捨選択にも苦心しました。改訂検討委員７名が分担し相互に検討を重ねるとともに、「観光ボランティアガイドつるが」の会員の意見なども反映する中で、改めて敦賀の魅力を深く広く知らされた２年間の日々でした。

本書が、港を中心に発展してきた敦賀の「いまむかし」をより深く知っていただくための資料として、敦賀の市民の皆さんにも観光客の皆さんにも活用いただければ、本書を作成した私ども「観光ボランティアガイドつるが」の望外の喜びです。

この「みなと・つるが・いまむかし」を今後も有意義な図書として維持していくため、皆さまにご利用、ご活用いただく中でのお気づきの点、新たな情報、ご意見などを広く賜ります様よろしくお願いいたします。

２０２２年７月

観光ボランティアガイドつるが
会長　増田 正樹

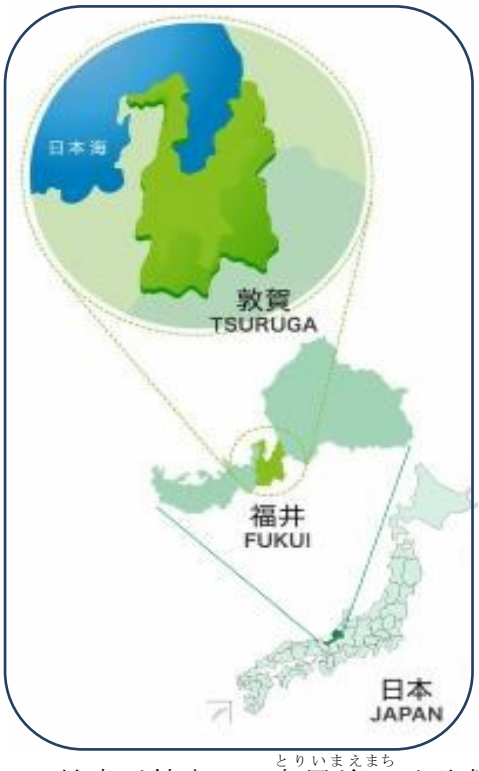
目　　次

1. 敦賀市の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
2. 敦賀港のあゆみ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
3. 敦賀の鉄道のあゆみ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16
4. 人道の港のこと ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
5. 氣比神宮 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31
6. 金ヶ崎とその周辺 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41
7. 常宮神社 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 51
8. 気比の松原 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 56
9. 西福寺 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 60
10. 柴田氏庭園 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 65
11. 船溜まり地区 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 70
12. 湾岸部のスポット ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 76
13. 山・里のスポット ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 83
14. 敦賀の遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 89
15. 敦賀の城跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 96
16. 敦賀の自然 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 101
17. 敦賀の古道 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 105
18. 敦賀の戦災 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 111
19. 大谷吉継 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 118
20. 松尾芭蕉の敦賀来訪 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 124
21. 水戸天狗党 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 132
22. 二代目大和田荘七 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 138
23. 敦賀のまつり ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 145

年表　敦賀の主な出来事と本誌掲載章 ・・・・・・・ 150

参考資料等一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 153

１．敦賀市の概要



敦賀市は、本州日本海側のほぼ中央部にある若狭湾の東部、福井県の中央に位置し、北に敦賀湾口を開いて日本海に面し、他の三方は山岳が連なり敦賀湾と平野部を囲んでいる。東西約 14km、南北約 26km、面積は 250.74km^{2}である。若狭湾に大きく張り出た敦賀半島が、敦賀湾を日本海の風や波浪から防ぎ、天然の良港を形成している。敦賀はこの地理的条件により、古くから大陸との玄関口として、そして越路の起点として、また日本海の海運と琵琶湖の水運を結ぶ結節点として栄えてきた港町である。

古代より畿内と北陸道を結ぶ西近江路（現国道 161 号）、深坂越え、新道野越え（現国道 8 号等）や木ノ芽古道（現国道 476 号等）、山陰道への丹後街道（現国道 27 号等）が通っており、また畿内や瀬戸内海に繋がる水運を利用できる琵琶湖からは愛発関を越えてすぐ北側に位置するため交通の要衝とされ、街道沿いには氣比神宮が鎮座して鳥居前町（とりいまえまち）が形成されて、敦賀港とともに発展してきた。

近代には、欧亜国際連絡列車の日本側の入口として、外国製の地球儀には、３都市から４都市のわずかの街しか記載されない日本の都市の一つとして、敦賀 TSURUGA が含まれていた。現在も鉄道や高速道路の結節点であり、３本の国道（８号、27 号、161 号）が走り、重要港湾敦賀港には、国内外を結ぶフェリー定期航路、RORO 船航路、コンテナ船航路が開設されているなど、日本海側の交通の要衝となっている。

街の歴史は古いが、越前国司配下、鎌倉時代の歴代守護配下、斯波（しば）氏配下、朝倉氏配下、酒井氏配下と移り変わる中、政庁が置かれた期間は少なく（安土桃山時代の短い大谷吉継時代が、敦賀全域を独立統括した唯一の地方政府であったといえる）、軍勢を持つほどの巨大寺社も無かったため、民間主導の商都の性格が強い。明治期に短期間（現在の福井県の領域を統轄した時期は３年半）敦賀県の県庁所在地だったこと、第２次世界大戦前に市制を敷いた点や、市街地の規模から、福井県嶺南地方の代表都市とされている。1937 年（昭和 12 年）に市制を施行した（全国第 139 番目）。

1960 年代以降、原子力発電所や関連施設を誘致し、歴代の敦賀市長は 1968 年（昭和 43 年）発足の全国原子力発電所所在市町村協議会会長を務めている。

敦賀市の市章

周囲の円形は敦賀港を表して地勢を物語り、中央の角は「都奴賀阿羅斯等」の渡来に因んでその沿革を象徴している。
角の上部は敦賀港最初の文明施設としての灯台を具現し、港湾都市としての将来への発展を意味している。

新市役所庁舎
令和４年１月４日供用開始

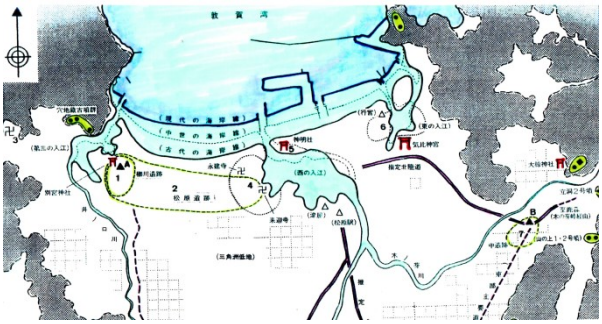
2. 敦賀港のあゆみ

敦賀は古くから陸路と海路が交わる所であり、水陸両交通の要地であった。越前海岸と敦賀半島に囲まれた敦賀湾に開かれた敦賀津は、古代から日本海中部以西はもとより、遠く朝鮮・中国にもつながる屈指の良港であった。また、「都怒賀阿羅斯等」の来着や渤海使の渡来等外国との交流もあった。

近世になると海運業者は日本海沿岸を中心に初期豪商として活躍し、その後も北前船の寄港地として繁栄した。明治時代に入ると敦賀港は鉄道の北進により貿易量が減少傾向となったが、1899 年（明治 32 年）国際貿易港となり大陸との貿易が活発化し、1912 年（明治 45 年）には欧亜国際連絡ルートの大陸への玄関口となった。太平洋戦争末期 1945 年(昭和 20 年)に敦賀湾は機雷封鎖によりその機能を失ったが、1952 年（昭和 27 年）から復興が始まった。1982 年（昭和 57 年）鞠山に新港が併設されてからは、日本海側港湾として阪神・中京の二大経済圏に最も近い地理的特性を活かし、物流拠点港として重要な役割を果たしている。

古代の敦賀津

古代の敦賀は入り込んだ敦賀湾の奥に、さらに潟湖とよぶ船の停泊できる２つないしは３つの広大な水面があって、まさに天然の良港であり、笥飯の浦と呼ばれた、２千年以上の昔から栄えた歴史ある港であった。日本書紀には、今から約２千年前、任那の王子「都怒我阿羅斯等」が来朝居留したことにちなんで「角鹿」という地名を朝廷から賜り、その後、713 年(和銅6 年)に地名を縁起のよい 2 字に書き替えるよう勅命があり、現在の「敦賀」になったと伝えられている。また、北陸道の諸国から廻送される官物を、近江国の海津・塩津・琵琶湖上を経由して都へ運ぶ中継地としての湾岸交易ばかりでなく、大陸との交易基地としても日本を代表する要津であった。



このような、大陸からの玄関口＝国際港としての役割に加え国家としての重要性は、５世紀中頃に構築された「向出山１号墳」から金メッキの甲冑が出土しており「倭の五王」の時期に敦賀が対外的な港であったこと、804 年(延暦23 年)に敦賀に渤海使を迎えるため松原客館が設けられたことから察することができる。なお、松原客館については未だその場所を特定するには至っていないが、「延喜式」によると、敦賀を国津として定め氣比神宮司の監督を受ける規定が記されており、日本海側の各地に来着した渤海使を都へと送迎する重要な役割（接遇・交歓・検疫等）を果していた。また、敦賀を経由して北国と都の間を結ぶ標準輸送日数・運賃等を既に定めていることからも、敦賀津は物流の拠点港だったことがわかる。

「延喜式」には、平安時代、敦賀において唐物（中国からの輸入品）を購入したとの記述が散見されており、特に渤海・宋･朝鮮半島諸国との往来は盛んであった。

３．敦賀の鉄道のあゆみ

日本における鉄道敷設

ジェームスワットが 1803 年(享和３年)に蒸気機関を発明し、その 22 年後の 1825 年(文政８年)に、イギリスでジョージ・スティヴンソンが、ストックトン港～ダーリントン～シルドン近郊の炭鉱間の約 40 ㎞で蒸気機関車を走らせたのが、世界初の鉄道の開通であった。その後、ヨーロッパや北アメリカで鉄道敷設が進められた。

日本では、1854 年(嘉永７年)ペリー提督が将軍に蒸気機関車の模型を献上し横浜で試運転、1866 年(慶応２年)頃には在留外国人から鉄道の敷設要望が出されている。鉄道敷設計画は、明治政府による、全国的な産業や商業を発展させるためには、江戸時代の交通体系(馬借や水運が担う)から大きな転換が必要であるとの方針があった。1869 年(明治２年)、鉄道敷設を決定し、その路線として、東京～京都間を結ぶ幹線と、東京～横浜間、京都～神戸間及び琵琶湖沿岸～敦賀間の三支線が計画された。1872 年(明治５年)に新橋～横浜間で日本で初めての鉄道が開業した。その２年後、1874 年(明治７年)には大阪～神戸間が開業し、1877 年(明治 10 年)には京都～神戸間が全線開業した。また、産業用鉄道としては、1880 年(明治 13 年)に、釜石鉱山鉄道(鉄鉱石輸送)と幌内鉄道(石炭輸送)が開通している。

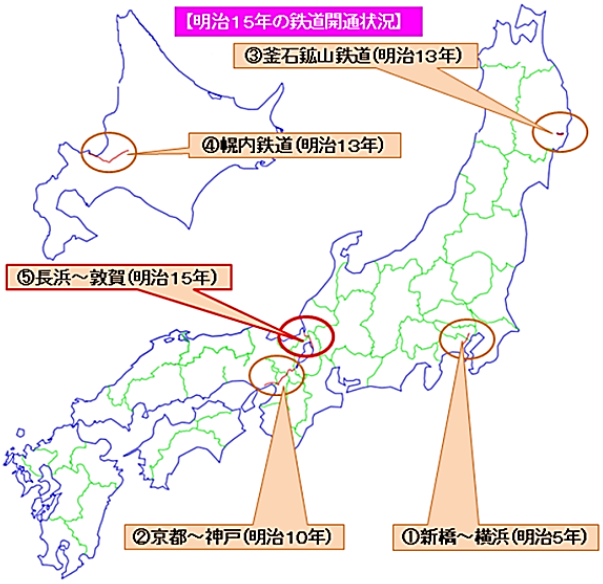
鉄道錦絵「横浜海上蒸気車鉄道之図」明治時代　三代歌川広重画

政府が鉄道建設に力を入れたのは、鉄道は単なる交通機関だけの問題ではなく、産業革命の推進役であり、これから日本が進めようとしている資本主義の発展に欠かすことのできないものであったからである。鉄道の発達を世界史的に見れば、1830 年～1850 年は創設時代、1850 年～1900 年は躍進時代、1900 年～1920 年は完成時代とみることができる。日本の鉄道網は 1915 年（大正４年）ころにほぼ完成したことから、欧米に遅れて鉄道敷設に着手した日本も、完成時には世界水準に追い着いたこととなる。

敦賀～長浜間の開業

敦賀～京都間の路線については、当初は敦賀と琵琶湖岸沿いの都市を鉄道で結び、更には塩津を起点とした交通網の整備（敦賀～米原間の鉄道建設と大津以東の蒸気船利用というルート）が決定され、1871 年（明治４年）６月に京都～大津、塩津～敦賀）の測量を開始した。1879 年（明治 12 年)10 月、米原～塩津～敦賀間の敷設計画が決定した。

1880 年（明治 13 年)、琵琶湖沿岸の港が長浜と決まったことから、長浜～敦賀間の敷設に変更され、ルートも木ノ本か



「みなと・つるが・いまむかし」正誤表

2022 年 10 月 15 日

本書について、学識者からのコメントを含め、以下のとおり訂正させていただきます。

頁	行	誤	正
2	5	数年間角鹿の地を統治した・・	三年間留まり垂仁天皇に仕えこの地を統治した・・
3	12	明治 12 年	明治 22 年
3	34	（97 頁 2 行も）　「尊良　恒良」の読みは、「たかなが　つねなが」と「たかよし　つねよし」の２つの説がある。	
8	34	（同頁 2 か所）　市政施行	市制施行
9	23	他画像との被り	敦賀原子力発電所 2 号機
10	28	804 年（延暦 23 年）に　35 行目　「延喜式」には	804 年（延暦 23 年）以降に　「日本霊異記」等には
13	34	大正末から昭和・・・世界的に大不況でこのとき敦賀と	大正時代にもたらされたウラジオ景気においては敦賀と
15	29	洲崎の高燈籠（市史跡）　31 行目　山車会館別館	洲崎の高燈籠（県史跡）　山車会館別館登録有形文化財
17	8	ルビ　あそぐち　17 行目　あそぐちくち	あそうぐち　あそうぐち
17	19	鉄道工技養成所	鉄道工技生養成所
18	32	キャプション　（明治 21 年）	（明治 21 年～22 年）
19	4	曽路谷（ルビ　そだじたに）	曽路地谷（ルビ　そろじだに）
31	20	ルビ　たけのうちのすくねみこと	たけのうちのすくねのみこと
33	10	椌の樹であり、	椌の樹と伝えられている。
33	28	ルビ　ありすかわのみやたけひと	ありすがわのみやたけひと
34	16	旗掛松　18 行目　衛戍病院（87 頁 19 行も）	旗掲松　衛戍病院
35	6	ルビ　ひもろぎいわさかい　34 行目　定めなき	ひもろぎいわさか　定なき
38	32	ルビ　つるそめ	つるめそ
39	38	「延喜式」によれば	「日本後紀」や「延喜式」によれば
40	13	木鼻（虹梁）	木鼻
48	6	プコフィエフ・・イギリスの冒険家・・敦賀港に上陸	プロコフィエフ・・ノルウェーの冒険家・・敦賀港を経由
48	19	６本の柱の内側に	桁行では６本の柱の内側に
50	3	ルビ　くげしゅう	くぎょうしゅう
50	28	その日、・・・説得により無血開城。	その日落城、・・勧告を受け入れ城を明け渡した。
~~53~~	~~4~~	~~昭和 18 年~~	~~昭和 13 年~~
53	12	釣り具を取り付ける部分が竜の頭を模した装飾は	釣り具を取り付ける竜頭に装飾的な筒（旗挿）があるのは
57	8	氣比神宮社記	氣比宮社記
58	2	松嶺如奏曲　海涛和洋々	松籟如奏曲　海濤和洋々
58	28	秋の晴れ　30 行目　ルビ　つえせき	秋の晴　つえあと
59	4	一町は、約 900 メートル	一町は、約 109 メートル
62	12	室町時代の作（東山・・・頃）と	室町時代後半の作と
62	33	元禄ま年間（1764～71 年）、・・・遡る可能性がある。	元禄年間（1764～71 年）まで遡る可能性がある。
68	32	呉経の一つで、荒地が変遷したという中国の詩経の中に甘棠の詩が載っている。それは「宗」の	五経の一つで、中国の詩経の中に甘棠の詩が載っている。それは「周」の
70	3	港大橋　9 行目　改修され蔵や町屋	なし（削除）　改修された蔵や町屋
71	30	昭和初期の日本三大建築物の一つに数えられていた。	昭和初期の代表的な建築物とも言われた。
75	6	訪れたのであろう。	訪れた話が作られたのであろう。
76	37	オホト（継体天皇の祖先）	オホト（継体天皇）
77	9	忠稲	忠稠
79	15	桐実	油桐の実
81	21	色（いろ）（色ケ浜）	色浜（いろはま）（色ヶ浜）
82	14	明神峠	明神埼
83		「山・里の地域」の図	地区境界等にズレがある。
83	15	愛発は元の名を、・・当てられた。愛発の・・と思われる。	愛発の名は、・・当てられた。愛発の・・・とも思われる。
83	22	大津京（天智天皇）の時代	奈良時代
83	24	大津の都への	奈良の都への
85	7	キャプション　親鸞聖人有乳山跡」	「親鸞聖人有乳山舊跡」
93	17	1 号墳（市指定史跡）は直径約 26m であるが、4 号墳とともに豊富な副葬品の出土から郡内の盟主墳と考えられる。	1 号墳（市指定史跡・未調査）は直径約 26m で郡内の盟主墳と考えられる。これに次ぐ規模の 4 号墳からは豊富な副葬品が出土している。
94	28	牛革製の帯飾り	石の飾りがついた牛革製の帯
96	7	山城は、山など　27 行目　石垣を積む礎石建築に	山城は、その多くが山など　石垣を積み、礎石建築に
97	26	ルビ　てらだうめのしょう	てらだうねめのしょう
99	28	敦賀湊の町立らが、・・・完成させた大谷吉嗣の城郭	大谷吉継が敦賀湊の町立と並行して完成させた城郭
100	11	12 枚あったらしいが、現存する 9 枚　25 行目　瓜生衝	13 枚あるが、そのうち 9 枚　瓜生衝
105	21	井之上　34 行目　ルビ　ひじょうち	井上　ひていち
107	1	大浦から山門を通り	大浦から山門（または塩津から沓掛）を通り
118	19	ルビ　おだに	おおたに
121	4	永賞寺に九輪の石塔	永賞寺に伝承であるが九重の石塔
125	23	二柳三四坊　ルビ ふたやなぎさんしぼう	三四坊（勝見二柳）　ルビ さんしぼう（かつみじりゅう）
126	17	草履を脱いだ。　34 行目　思わぬ賓客に玄流は、	草鞋を脱いだ。　曾良の伝言で待ち望んでいた玄流は、
129	4	占なわん	占なはん
132	27	田丸稲之衛門	田丸稲之右衛門
134	9	12 月 10 日	12 月 9 日
136	3	四条隆歌　9 行目　武田彦衛門	四条隆謌　武田彦右衛門
137	1	行寿院俊山	行寿院峻三
144	25	大和田荘七寿像	大和田荘七翁寿像
145	7	記銘から約 400 年前から	紀年銘より 400 年以上前から
147	24	ルビ　もろびと	もろと